

# j-milkレポート

vol-3  
2011年12月

特集 : TPP がもたらす厳しい競争は食品産業自体に深刻な影響

理事会報告 : 第3回理事会

海外研修報告 : IDFワールドデイリーサミット2011

第38回酪農海外現地実務研修会

需給予測 : 平成23年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通し

j-milkレポート

j-milk レポート vol.3 発行日/2011 年12月

編集・発行/社団法人 日本酪農乳業協会

住所 : 〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階

TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>





- 02 普及専門部会の現況と牛乳乳製品健康科学情報事業のあり方  
社団法人日本酪農乳業協会 常勤理事 高見裕博
- 03 特集：ややキツイ運動後牛乳摂取が効果的 (酪農乳業セミナー)
- 04 特集：TPP がもたらす厳しい競争は酪産業界自体に深刻な影響  
(酪農乳業セミナー)
- 05 研修会報告：牛乳を活用した食育活動を推進するために  
(学乳・指導者向け食育・牛乳教育研修会)
- 06 セミナー報告：栄養士を対象にしたセミナー「牛乳を科学する」  
(栄養士セミナー)
- 07 研究報告：牛乳が持っている特性を探る
- 08 理事会報告 第3回理事会
- 11 会議報告 9月～12月までに行われた会議
- 13 需給予測：平成23年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通し
- 19 海外研修報告：IDFワールドフォーラム2011 (nパルマ)
- 20 海外研修報告 第38回酪農海外現地実務研修会に参加して
- 21 HP紹介放射性物質検査結果
- 22 今後のスケジュール

## 普及専門部会の現況と 牛乳乳製品健康科学情報事業のあり方

Yasuhiro  
Takami  
高見 裕博



普及専門部会の活動状況について、主に牛乳乳製品健康科学情報事業の内容を中心に、高見常勤理事に聞いた。

昨年までは牛乳乳製品健康科学会議と、牛乳栄養学術研究会の下に牛乳乳製品健康科学委員会があり、その中に学術部会と広報部会があった。そこで議論をしながらエビデンスをつくってきた。牛乳乳製品健康科学会議では、特に新谷問題に対応していただいた。牛乳栄養学術研究会には牛乳乳製品に関する科学的研究及び調査をしていただき、その結果を各種講座やセミナーなどを中心に発信してきた。昨年は、「牛乳乳製品の摂取が多いほどメタボになっていない」という画期的な疫学調査結果が論文発表された。この研究会には、医歯薬学・栄養学・食品科学・畜産学・スポーツ科学など約300名の先生方が参加されている。

本年度から牛乳乳製品健康科学委員会を廃止し、新しい組織体制として、健康科学委員会とマーケティング委員会をつくった。

また、(旧)牛乳乳製品健康科学会議と牛乳栄養学術会議をドッキングし、その役割を明確にし、研究と情報発信を強化していこうということで、外部組織として新しい牛乳乳製品健康科学会議をつくる。

2つの委員会では、牛乳乳製品健康科学情報事業の戦略を策定する。12月初旬までに3回の会議を行い、第1回目で現状把握と課題抽出。第2回目で課題について議論。第3回目で課題解決策を出し、24年度の方針案を決める。それを1月中旬開催予定の普及専門部会で議論してもらう。健康科学に関する戦略的な取り組みについては、委員会の中で議論の最中で、現段階ではまだ途中段階であるという前提で話したい。

### 3つの指針のもとに事業戦略

事業戦略は、1.生活者が期待する牛乳乳製品機能価値研究、2.生活者に伝わりやすく、わかりやすい情報開発、3.業界関係者・インフルエンサーへの情報伝達、の3つとしたい。

すなわち、生活者を起点とし、生活者のニーズにそった機能価値の研究をすること。そして得られた情報は生活者に伝わりやすく、わかりやすい表現で業界関係者及

びインフルエンサーへ伝える。

こうした戦略にそって事業展開をしていく。

事業戦略の一環として、生活者が期待する機能価値は何かを調査した。その結果、①骨強化・骨粗鬆症予防、②リラックス・安眠機能、③免疫力強化機能、④メタボ等生活習慣病予防改善機能があげられた。この4つのテーマの中から、生活者にとって最も価値があり、消費につながるコンセプトを定める。それに基づき牛乳乳製品健康科学会議で研究し、エビデンスをつくってもらう。健康科学会議では、過去のエビデンスの評価の上で、研究テーマ、研究計画を決め、研究をし、その結果を評価する。それを生活者に伝わりやすい表現に落とし込んで、オーソリティ(健康科学会議の先生方)を通してインフルエンサーと業界関係者に伝えていく。インフルエンサーは、医師、栄養士(日本栄養士会・全国学校栄養士協議会)、メディアとする。そして最終的には業界関係者、インフルエンサーを通して、一般消費者のオピニオンリーダーまで情報伝達が行なわれることを目指したい。

### 健康科学会議に新しい機能

牛乳乳製品健康科学会議に期待する役割は、1.機能性価値研究の立案と推進、2.業界関係者・インフルエンサーへ生活者に伝わりやすく、わかりやすい情報の伝達、3.「ミルクへの助言、である。

研究委託は、内部で行うのか、それとも広く公募して行うのか、これからの議論となるが、今まで以上に開かれた研究体制をつくっていききたい。それは研究の質を高めることになる。

会議には多彩なメンバーがいるので、いろいろなコラボレーションが考えられる。それは研究組織としてひとつの強みである。

もうひとつは、特に酪農科学の若手研究者を育成したい。以前は多くの大学に酪農科学講座があった。全国の国立大学でいま残っているのは北大だけ。酪農科学の研究者を育成していくことで、ミルクを語る先生を増やしたい。

今後は、研究報告会等を開催し、研究者の意欲を高めることにもつなげていきたい。

(取材日:11月15日)

酪農乳業セミナー

# ややキツイ運動後の牛乳摂取が効果的

開催日:平成23年10月25日 開催場所:Jミルク会議室 参加人数:55名

10月25日Jミルク会議室で、Jミルク会員と構成員に限定したセミナー『ややキツイ運動』の後に牛乳を飲もう～より効果的に健康をアップする方法～』が開催され、多くの酪農乳業関係者が聴講した。講演内容の一部を抜粋して掲載する。

## 高齢者でも運動後30分以内にコップ1～2杯の牛乳を摂取することで体温調整能の改善を促進

熱中症というのはどういう年代の人がなるのでしょうか。最も被害を受けるのは高齢者です。なぜかという体温調節能は、加齢によりその機能が低下し、高齢者の反応は若い人に比べて1/3程度なのです。そういう人に対して、「糖質・蛋白質サプリメント(牛乳)を摂取してもらえば体温調節能が上がるのではないか」という仮説のもとに実験を行いました。68歳の人を2つのグループに分けて『2ヶ月間、週に3回1時間自転車こく』という、持久性トレーニングを行ってもらいました。ややきついと感じるこのトレーニングを行ってもらい、この2ヶ月前後の血液量と体温調節能を計りました。プラセボ(偽薬)を飲んだグループでは、2ヵ月後でも血漿アルブミン量、血漿量共に変わりませんでした。しかし糖質・蛋白質サプリメント(牛乳)を摂取したグループでは、血漿アルブミン量、血漿量共に増え、発汗も改善し、皮膚血管の開きやすさも改善しました。つまり高齢者でも運動トレーニング中に、糖質・蛋白質サ



信州大学医学系研究科  
スポーツ医科学分野教授  
能勢 博氏

京都府立医科大学 医学部卒業。医学博士。専門は環境衛生学、運動生理学、温熱生理学、運動トレーニング方法の開発。著書『熟年体育大学実践マニュアル』(共著、小社刊)



リメント(牛乳)を与えると、血漿アルブミン量・血漿量が増加し、体温調節能が改善された、ということが分かりました。

若年者においても同様に運動トレーニング中の糖質・蛋白質サプリメント(牛乳)の摂取を行ったところ、血漿アルブミン量・血漿量が増加し、体温調節能が改善した。

## 体力の増加は生活習慣病指標を低下させる！ インターバル速歩で体力の向上を。

一日一万歩、毎日歩くとどのような効果があるのかを調べてみると、「血圧がちょっと下がる」、「血液がややサラサラになる」ということが分かりました。しかし、大事なポイントは体力が向上しないということです。欧米では当然と言われており、その原因は負荷が弱すぎるということです。

もちろんジムに行けば、負荷をかけた運動は可能ですが、ジムに行かずにできないかと考えたのが『インターバル速歩』です。インターバル速歩とは、ゆっくり歩き3分、速歩3分を繰り返す運動トレーニングです。このインターバル速歩で、速歩が一日に30分位となるように5ヶ月間継続した場合、膝伸展力が10%以上、膝屈曲力が16%向上、それに伴い最大酸素摂取量、心肺機能が10%向上となり、5ヶ月間で10歳位若返った感じになりました。

生活習慣病を予防するために、「よく寝よう」、「食べものに注意しよう」など色々なことが言われていますが、根本的に最も重要なのは、体力です。

調査において、体力が向上することで、どの生活習慣病指標が向上したかという、「血圧」、「血糖」、「BMI(肥満)」が、特に低体力群において劇的に変化するという結果が見られました。

酪農乳業セミナー

# TPPがもたらす厳しい競争は食品産業自体に深刻な影響

開催日:平成23年11月4日 開催場所:東京 参加人数:125名  
開催日:平成23年11月16日 開催場所:京都 参加人数:43名

11月4日東京、11月16日京都において、Jミルク主催による「経済連携協定(TPP他)の進展状況とその酪農乳業への影響について」と題するセミナーが開催され、農林水産省担当官が、「経済連携協定(TPP他)の概要と今後の方向性について」と題し、生源寺教授が、「あらためて農業・農政のあり方を考える - 経済連携問題と酪農・乳業 - 」と題して講演を行った。



農林水産省生産局  
牛乳製品課課長  
倉重 泰彦氏  
(東京)



農林水産省生産局  
牛乳製品課乳製品調整官  
渡辺 裕一郎氏  
(京都)

下記に生源寺教授が行った講演内容の一部を抜粋して掲載する。

## 農業界と経済界の悲しい対立を解消し、 冷静な議論を組み立て直すことが急務



名古屋大学大学院生命農学研究科  
生命技術科学専攻教授  
生源寺 真一氏

TPPが経済の問題以上に複雑になっているのは、国際パワーバランスについての一つの判断要素が加わっていることだと考えます。

TPPは5年先、10年先どうかという交渉ですが、さらにその後を見越したときに何が起るか、何を起こしていくべきだろうか。これは端的に言ってアメリカ、中国との付き合い方ということ。普天間の問題、尖閣列島の問題について問題を提起したことの背景としては見逃せないように思います。

ガット・ウルグアイラウンドの時は、農業問題一色といってよかったのですが、TPPは様々な分野の方が反対派に入っていることを考えると、国際的な路線の問題が絡んでいることによって、アメリカを好きか嫌いかという心情が議論に重なって、少し違っているのかなと思います。

私が一番感じるのは、農業界と経済界の悲しい対立の構図をなんとか修復できないかということです。今日のセミナー参加者のように、酪農・乳業両方の方々がおいでになっているというのは、大変珍しいと思います。

このまま行くと結論がどちらに転んでも、恨み、つらみの山が残りがねない。そういう状況を緩和、回避していく必要があります。

もともと食料というのは、社会の安定を図る基礎、一種のインフラだと考えています。食品産業にとって農業、水産業は、質の高い食材の提供という観点から欠かさないパートナーです。

一方、日本の食料、農産物、水産物に対する購買力がしっかりしたものであるためには、経済そのものが元気でなくてはなりません。おそらく1990年を境に、かつてのような高度経済成長を望むことは非現実的だと思います。ただ横ばい、あるいは格差が極端にならないように健全な経済があるということは、実は日本の農業にとっても大切なことです。そういった意味でもこのような現状を改善し、冷静な議論を組み立てることは急務だと考えます。

直接支払いという観点から見ると、コメは、政治的には非常に難しい品物ですが、政策的には単純な問題です。(価格を下けた部分を財政で負担する)

率直に言って難しいのは乳製品です。仮に価格を下げて外国からの乳製品に対抗するとして、生産者に直接支払いをしたとしても、乳製品も、二次加工品もゼロ関税で入ってきます。

そのため農産物だけが問題ではなくて、二次加工品も相当厳しい競争にさらされるということになり、食品産業自体が深刻な影響を受ける可能性があります。

また仮に、農業生産を継続するための直接支払いをする場合、生産刺激対策(黄の政策)にならないか、WTO(世界貿易機関)協定など国際規律との整合性も考えなくてはなりません。

学乳・指導者向食育・牛乳教育研修会

# 「牛乳を活用した食育活動」を推進するために

## 平成23年度学校給食用牛乳飲用定着事業 栄養教諭学校栄養職員等向情報提供事業 「指導者向食育・牛乳教育研修会」

本事業は、(社)全国学校栄養士協議会、(社)中央酪農会議の協力と文部科学省及び農林水産省の後援のもと全国4カ所(北海道、新潟、京都、熊本)において、各都道府県教育委員会の推薦の79名の栄養教諭または学校栄養職員の参画を得て実施した。

この事業は、偏食や欠食など不規則な食生活等「食」をめぐる課題の社会問題化を踏まえ、未来を担う子供たちが生涯を通しての健康な食習慣を習得するために、学校給食をフィールドとする食育活動を通じて、子ども達やその家族に「食と健康」への理解を促進することを目標としている。

特に、学校給食及び家庭でも身近な食品である「牛乳を活用した食育活動を栄養教諭及び学校栄養職員などが学校現場で効果的に推進すること」に絞って研修会を開催した。

また、研修会を通して、栄養教諭及び学校栄養職員などが自発的に食育活動を行うことのできる地域ネットワーク構築の一助とすることもひとつの目的としている。

研修には3つの重要なポイントを盛り込んだ。

ひとつには、牧場での体験学習である。これは食の背景にある「いのち」「自然との共生」「食料生産に係る労働の特性」の実践的な学びを通して、「食や健康」に対する学習を推進するため、教育する

側が「気づき」を促し、学習意欲を高める手法を習得することが必要であるとの考えから推進した。

また、ひとつは、現代社会の子ども達の健康や食生活の諸課題に取り組む観点から、①食品としての牛乳の価値について、②医療・栄養・食習慣・食に対する価値観の醸成などの多様な視点、③家族から寄せられるアレルギー問題や放射性物質汚染問題等の課題への対処についても研修に織り込んだ。

さらには、「学校給食牛乳の歴史的な意義」や他の教科や特別授業と連携した食育に係る学習指導での課題、実際の授業の進め方について、牛乳をテーマとして、研修生同士のワークショップ(検討会)を3班に分かれて実施し、各班より、食育の進め方の具体策についての発表を行い、共有化を図った。

今後は、研修生からの直後アンケート及び追跡アンケート(2月実施予定)を踏まえた事業評価総括を実施し、事業報告書を作成していく。



スキルアップ風景



体験学習風景(牧草について)

## 平成23年度 指導者向食育・牛乳教育研修会の日程

開催日	開催場所	第一日目(敬称略)	第二日目(敬称略)
1 10月6日(木)~7日(金)	北海道 帯広市 帯広ワシントンホテル リパティヒル広瀬牧場	「オリエンテーション」 Jミルク 「子供の食生活課題の解決に向けた研究」 講師:久保田洋(Jミルク)	「牛乳生産現場の体験学習」 リパティヒル広瀬牧場 「食育に牛乳を活用する方策 についての研究」 講師:市場祥子 (社)全国学校栄養士協議会 「研修内容を踏まえ、研修生 参画のスキルアップ」 ~研修内容の振り返りと 学習指導案の論点整理~ 講師:上野留美子 (社)全国学校栄養士協議会
2 10月13日(木)~14日(金)	新潟県 三条市 新潟市 越前屋ホテル フジタファーム	「オリエンテーション」 Jミルク 「子供の食生活課題の解決に向けた研究」 講師:高見裕博(Jミルク)	「牛乳生産現場の体験学習」 フジタファーム 「食育に牛乳を活用する方策 についての研究」 講師:駒場啓子 (社)全国学校栄養士協議会 「研修内容を踏まえ、研修生 参画のスキルアップ」 ~研修内容の振り返りと 学習指導案の論点整理~ 講師:平石邦子 (社)全国学校栄養士協議会
3 10月27日(木)~28日(金)	京都府 京都市 南丹市 アークホテル京都 谷牧場	「オリエンテーション」 Jミルク 「子供の食生活課題の解決に向けた研究」 講師:高見裕博(Jミルク)	「牛乳生産現場の体験学習」 谷牧場 「食育に牛乳を活用する方策 についての研究」 講師:長島美保子 (社)全国学校栄養士協議会 「研修内容を踏まえ、研修生 参画のスキルアップ」 ~研修内容の振り返りと 学習指導案の論点整理~ 講師:小笠原睦 (社)全国学校栄養士協議会
4 11月10日(木)~11日(金)	熊本県 熊本市 合志市 アークホテル熊本 オオヤブティリーファーム	「オリエンテーション」 Jミルク 「子供の食生活課題の解決に向けた研究」 講師:高見裕博(Jミルク)	「牛乳生産現場の体験学習」 オオヤブティリーファーム 「食育に牛乳を活用する方策 についての研究」 講師:長島美保子 (社)全国学校栄養士協議会 「研修内容を踏まえ、研修生 参画のスキルアップ」 ~研修内容の振り返りと 学習指導案の論点整理~ 講師:福岡ちづる (社)全国学校栄養士協議会

栄養士セミナー

# 栄養士を対象にしたセミナー「牛乳を科学する」

## 牛乳の成分や機能、生活習慣病予防との関係について、栄養士に向けたセミナーを開催

Jミルクの事業戦略において、ミルクインフルエンサーとして位置づけられている『牛乳の飲用等、食生活の改善を直接指導し、実践している栄養士』を対象に、「牛乳を科学する」と題したセミナーを平成20年度より開催している。

平成23年度は、牛乳の最新のエビデンス・機能や価値・活用方法等の正確な理解促進を図り、日々の栄養相談・指導の一助とするとともに、全国ネットワーク化を目指すことを目的としている。「岐阜県」、「大分県」、「茨城県」、「鳥取県」、「千葉県」、「熊本県」、「秋田県」の全国7ヶ所で、各県栄養士会、(社)日本栄養士会の主催、Jミルクの共催により開催している。

セミナーの内容は、食品科学者による「基調講演」、医学者・栄養学者による「パネリスト講話」を行い、講演後に各講師と座長によるパネルディスカッションを行うとともに、参加者との質疑応答が行われる。

参加者は、各県栄養士会に所属する栄養士が主であるが、大学などで開催する場合は、将来管理栄養士となる学生も参加し、積極的な質問がなされている。



講演風景(茨城県)



講演風景(岐阜県)



パネルディスカッション風景(茨城県)

## 平成23年度 栄養士対象セミナー「牛乳を科学する」開催日程

開催日	開催場所	食品科学者(敬称略)	医学者(敬称略)	栄養学者(敬称略)	座長(敬称略)	テーマ
1 8月13日(土)	岐阜県 岐阜市 ふれあい福寿会館 3階302大会議室	大日向 耕作 京都大学准教授	細井 孝之 国立長寿医療研究センター 部長	小山 浩子 管理栄養士・料理研究家	高木 隼 岐阜聖徳学園短大教授	メタボ
2 10月8日(土)	大分県 大分市 大分県商工会議所 6階	田辺 創一 広島大学准教授	大関 武彦 浜松医科大学名誉教授 共立女子短大看護学科教授	佐藤 秀美 日本獣医生命科学大学非常勤講師	緒方 雅子 大分県栄養士会副会長	メタボ
3 10月31日(月)	茨城県 水戸市 常盤大学 講堂	根岸 晴夫 中部大学准教授	福岡 秀典 早稲田大学総合研究機構 教授	池本 真二 聖徳大学教授 小山 浩子 管理栄養士・料理研究家	荒田 玲子 常盤大学准教授 人間科学部健康栄養学科	メタボ
4 12月4日(日)	鳥取県 東伯郡 琴浦町 琴浦町生涯学習センター 4階 多目的ルーム	戸塚 護 東京大学准教授	村田 光範 こどもの城小児クリニック院長 東京女子医大名誉教授	廣田 孝子 京都光華女子大学教授	石川 行弘 鳥取大学名誉教授	食育
5 12月9日(金)	千葉県 千葉市 千葉市保健所 5階大会議室	玖村 朗人 北海道大学教授	児玉 浩子 帝京平成大学教授	石田 裕美 女子栄養大学教授	長谷川 克己 千葉県栄養士会会長	食育
6 1月22日(日)	熊本県 熊本市 尚綱大学 講堂	八村 敏志 東京大学准教授	林 泰史 東京都リハビリテーション病院 院長	塚原 典子 新潟医療福祉大学教授 小山 浩子 管理栄養士・料理研究家	未定	メタボ
7 3月3日(土)	秋田県 秋田市 秋田市文化会館 大会議室	北澤 春樹 東北大学准教授	宮崎 滋 東京通信病院副院長	星 清子 尚綱学院大学准教授	未定	メタボ 高齢者

## 平成22年度・研究報告より 牛乳が持っている特性を探る

牛乳乳製品に関わる栄養、機能等についての研究を医学・栄養学・食品科学・畜産学・スポーツ科学等の研究者で構成する日本酪農乳業協会牛乳栄養学術研究会の先生方に公募し、応募のあった研究課題の中から、牛乳乳製品健康科学委員会・学術部会及び牛乳栄養学術研究会幹事で構成する選考委員会の審査を経て決定し、22年は14題の研究課題について研究を委託しました。これら報告の要旨を紹介します。  
なお、内容の詳細については、「平成22年度牛乳栄養学術研究会委託研究報告書」をお読み下さい。

### 牛乳は、潜在的にストレス緩和作用に寄与している可能性がある

大日向 耕作 (京都大学大学院農学研究科食品生物科学専攻准教授)

#### 牛乳由来の新しい精神的ストレス緩和ペプチドの作用機構に関する研究

我々人間は哺乳類(Mammalia)である。「哺乳」は口にふくむ、あるいは食べることを意味することから、哺乳類は、乳を口にふくませて育てる生物群といえる。乳は哺乳類において子(仔)の健全な発達と生育のために母体が作り出す分泌液であり、乳児期では母乳のみで生育できる。

これまで我々は、乳タンパク質由来の精神的ストレス緩和(抗不安)ペプチドを見出すとともに、さらに今回、新しい抗不安ペプチドを追加したが、牛乳から機能性ペプチドが生成することは極めて合目的といえる。

また、過度の精神的ストレスは精神疾患だけでなく、メタボリックシンドロームや生活習慣病の発症リスクを上昇させることから、現代のストレス社会では精神的ストレス緩和素材が強く望まれている。実際、牛乳乳製品の摂取がメタボリックシンドロームの予防に有効である可能性があることが最近報告されており、牛乳由来の抗不安ペプチドが潜在的に寄与している可能性が考えられる。

これまで我々は、牛乳タンパク質の一次構造中に数多く含まれるジペプチドTyr-Leu(YL)が、抗不安薬として一般的に使用されるジアゼパムに匹敵する強力な抗不安作用を示すことを、高架式十字迷路試験などの行動薬理的試験により証明した。

さらに本研究では、YLの構造 - 活性相関を検討し、YLのC-末端側への鎖長延長が許容されることを明らかにした。特に、YL

配列を含有する牛乳由来の低分子ペプチドに着目し検討したところ、Tyr-Leu-Glu(YLQ)やTyr-Leu-Tyr(YLY)が強力な抗不安作用を示すことを明らかにした。

さらに、これらの牛乳由来新規ストレス緩和ペプチドについて作用機構を検討した。

#### 要約

これまで我々は、牛乳タンパク質の一次構造中に数多く存在するジペプチドTyr-Leu(YL)が、強力な精神的ストレス緩和作用(抗不安作用)を示すことを見出している。

さらに、YLの構造 - 活性相関を高架式十字迷路試験とオープンフィールド試験により検討したところ、Trp-Leu(WL, 0.1mg/kg, i.p.)など、(芳香族アミノ酸)-Leuという構造のジペプチドが強力な抗不安作用を有することを明らかにした。さらに、WLは経口投与(0.3 mg/kg)でも有効であった。

次に、WLのメディエーターを検討した。WLの抗不安活性は、セロトニン5-HT<sub>1A</sub>受容体、ドーパミンD<sub>1</sub>受容体およびγ-アミノ酪酸(GABA)<sub>A</sub>受容体に対するアンタゴニストで完全に阻害された。

なお、μおよびオピオイド受容体のアンタゴニストや、シクロオキシゲナーゼの阻害剤によっては阻害されなかった。したがって、WLは、YLと同様に、5-HT<sub>1A</sub>、D<sub>1</sub>およびGABA<sub>A</sub>受容体の活性化を介する新しい情報伝達経路を介していると考えられる。

なお、YLやWL、FLなどの(芳香族アミノ酸)-Leu配列は、牛乳タンパク質の一次構造中に多数存在することから、牛乳のストレス緩和作用に潜在的に寄与している可能性が考えられる。

さらに、YL配列を有するトリペプチドについて抗不安作用を検討したところ、N-末端側への鎖長延長は活性を著しく低下させるが、C末端側への鎖長延長は許容されることが判明した。

実際、牛乳タンパク質由来のTyr-Leu-Glu(YLQ)やTyr-Leu-Tyr(YLY)が抗不安作用を示した。

## 第3回理事会

開催日:平成23年10月21日 開催場所:Jミルク会議室

10月21日、Jミルク会議室において、第3回理事会が理事16名の出席(内代理人出席3名を含む)監事2名出席で開催された。高野瀬会長の挨拶、農水省畜産部牛乳乳製品課倉重課長の来賓挨拶後、協議を行った。

### 第3回理事会における議題

- 1)平成23年度事業の進捗状況及び下期のスケジュールについて
- 2)新公益法人制度移行への対応方向について
- 3)その他

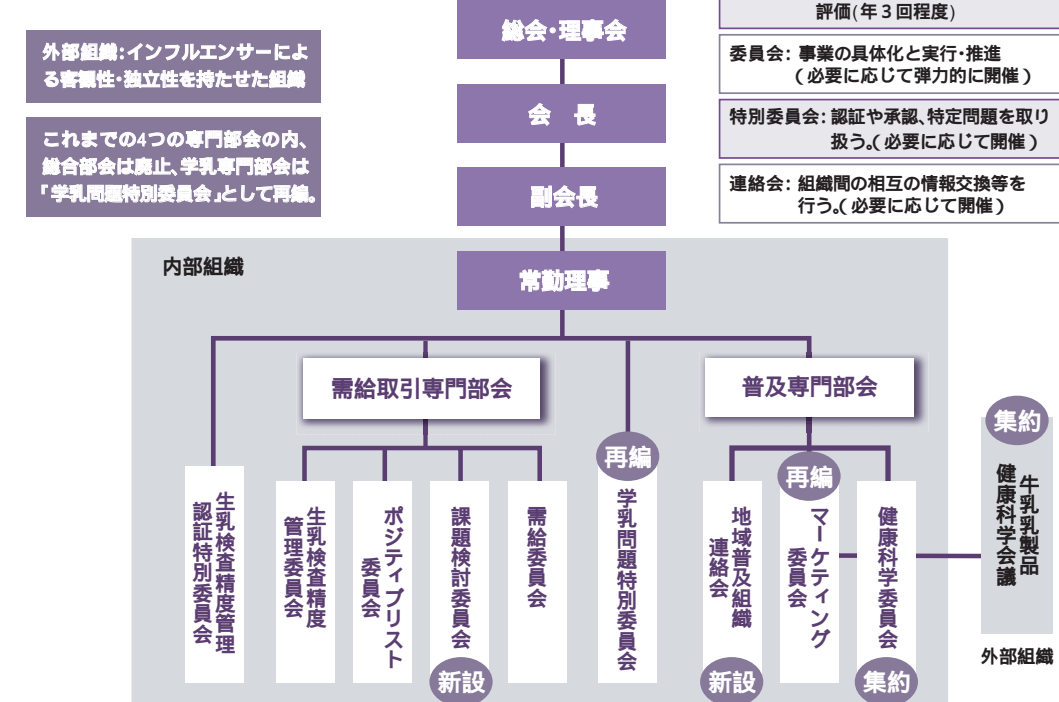
#### 要望、意見事項

- 1)事業の進捗状況及び下期のスケジュールについて、以下の意見が出された。
  - ①学乳問題を協議する学乳問題特別委員会の推進を要望する。
  - ②地域普及活動の推進を図るよう要望する。
  - ③放射能問題に関するエビデンスの研究を強化すべきである。

#### 決議事項

- 事業の進捗状況及び下期のスケジュールについて報告し、承認された。
  - ①本年度事業計画の位置付け
  - ②事業及び推進体制の枠組み
  - ③上期事業の推進状況
  - ④下期の主な事業推進とスケジュール
- 次のスケジュールについて承認された。
  - ①臨時総会開催(3月1日)平成24年度事業計画・収支予算審議等
  - ②通常総会開催(5月29日)事業報告・決算承認、法人移行等承認
  - ③理事会開催:第4回(1月20日)、第5回(2月17日)、24年度第1回(5月17日)、2回(5月29日)
- 次の案件について承認された。
  - ①新公益法人制度移行については、一般社団法人への移行とし、平成25年4月1日の設立登記を目指す。
  - ②生乳検査精度管理認証特別委員会設置規程の改正。
  - ③TPP交渉参加への反対をJミルクとして表明すること。

### 新たな事業推進体制



上期の事業の進捗状況 (概要)

【震災復興再生対策推進特別事業】

被災の実態調査、放射能問題への生活者意識調査(4月・6月)を実施し、会員に情報提供。

7月13日復興再生支援のための「集い」全国から400名超の参加。牛乳の放射性物質汚染に係る誤解を改善するための情報活動。

Q & Aの作成・提供、専用WEBサイト「牛乳ナビ」の運営(7月中旬以降)

原乳及び牧草類のモニタリング検査結果(県別にグラフ化)のポータルサイトの運営(8月以降)

学校、小売店舗、消費者組織にパンフレットを2万部配布(9月初旬)

業界関係者の風評対策会議をこれまで3回開催し、作業の分担及びそれぞれの役割などを確認し共同の取り組みを推進中。

被災地(避難所等)へ日本栄養士会と連携して牛乳を配布。(21箇所17万本)(9月末現在)

適切な放射能問題への対応を進めるための業界セミナー(唐木先生)を開催。(約100名の参加)(9月初旬)

【牛乳及び牛乳乳製品流通関連事業】

新体制による需給取引専門部会及び委員会活動を開始。(9月)震災の影響等も含めた環境変化による生乳生産の減少、牛乳類の生産及び消費環境の変化などの対応するため、需給見通しを5回公表し、需給情報を迅速に提供。(5月以降)【強化】

生乳検査精度に係る信頼性確保部門研修会(7月開催)及び新

たな15施設を認証(4月及び10月)【継続】

インテージ店舗売上データなど各種データを継続してHPで提供。【継続】

会員にJミルクレポート(年4刊)の発刊開始。既に2回発刊。【新規】酪農乳業の共通課題の検討を開始。「酪農生産基盤の弱体化への対応」をテーマに課題検討委員会2回開催。【新規】

共通課題に対する業界内の議論・認識の共有化を図るためにセミナー(TPP問題)の開催(東京・京都)を準備中。【新規】

【牛乳乳製品普及関連事業】

新体制による普及専門部会及び委員会の活動を開始。(9月)新知見の開発のための委託研究10テーマ、メタボの実証研究4テーマを実施中。【継続】

海外の牛乳に係る健康科学情報を収集する体制を整備。(10月より開始。【新規】

メディアミルクセミナーは第1回(食事とストレス)を8月、第2回(時間栄養学)を10月に開催。【継続】

医学関係者向けセミナー(年4回)【継続】、栄養士向けセミナー(年7回)【継続】、学校栄養職員を対象にした牛乳食育セミナー(年4回)【強化】の仕組み作り。

栄養健康機能の訴求戦略策定のための消費者調査を終了。【新規】

地域普及組織連絡会を開催し、地域普及活動との連携について議論を開始。(9月)【新規】

学乳制度に係る24年度補助事業等の要請を中央会員との連名で農水省に提出。(8月末)【継続】

下期の主な事業推進とスケジュール(概要)

【下期の事業推進の基本的な考え方】

23年度事業について

本年度事業の内、未着手及び取り組みが遅れているものについては、業務執行体制の実態を踏まえつつ、全体の事業の中で優先順位を整理し、12月までには目途をつけるべく事業推進を行う。

24年度事業について

24年度事業計画及び収支予算については、適切な事業の推進を図るために、23年度中に承認を得る。(1月理事会で基本方向提示、2月理事会で成案化、3月臨時総会で決定)

なお、24年度事業計画については、事業毎の目的及び目標(極力数値化する)並びに改革を円滑に推進するための諸課題への対応策等を盛り込むものとし、1月中を目途に、各委員会及び専門部会で原案の検討を終了する予定。

新公益法人への移行準備を開始する。

【震災復興再生対策推進特別事業】

牛乳の放射性物質汚染に係る風評被害に適切に対応するため、業界関係者の風評対策会議を適宜開催し、継続して共同の取り組みを推進する。

放射能問題への生活者の意識の変化を把握するための調査を継続し、適切な対策の取り組みに供する。

ミルクサプライチェーンの特徴や安全・安心のための業界の取り組みに対する消費者の理解を促進するためのメディア

及び消費者組織対策を推進する。

「食生活ジャーナリストの会」共催のメディアツアー。(酪農

生産現場及び乳業工場への視察研修)11月実施)

【生乳及び牛乳乳製品流通関連事業】

需給見通しを継続してきめ細かく実施し、需給情報を迅速に提供。【強化】生乳のポジティブリスト制度対応としての動業等定期的検査を11~12月に実施。【継続】

生乳検査技術者の全国研修会を年度内に開催。【強化】

共通課題に対する業界内の議論・認識の共有化を図るために会員向けセミナー。(TPP問題・講師は農水省及び生源寺教授を予定)を10~11月に開催(東京・京都)。【新規】

Jミルクレポートの発刊。(12月、3月予定)【他事業と共通】【新規】各委員会については、12月までにそれぞれ2~3回の開催予定。

【牛乳乳製品普及関連事業】

海外の牛乳健康科学情報を収集提供。(9月より開始)【新規】第3回メディアミルクセミナーを2月に開催予定。【継続】

医学関係者向けセミナー(全国で4学会会場)を開催。【継続】

栄養士向けセミナー(全国7会場)を開催。【継続】

学校栄養職員向け食育セミナー(全国4会場)を開催。【強化】

会員向け健康科学セミナー10月以降、随時開催予定。【新規】

24年度の本格実施に向けた事業(乳の社会文化価値情報の収集・開発・提供、インフルエンサーのネットワーク化・健康科学学会への支援、メディアへの戦略的広報活動)の仕組み作り。【新規】

各委員会については、12月までにそれぞれ2~3回の開催。

今後のJミルク事業の進め方とスケジュール

		21~22年度		23年度												24年度												25年度
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月		
事業推進	事業改革についての検討	改革の実行						上期の業務推進						新法人移行認可申請作業						1日 旧法人解散 新法人設立								
事業総括・計画作成		24年度(以降)事業計画の検討と作成(事業別目的・目標の明確化)						上期の業務推進						新法人移行認可申請作業														
総会日程				2日 通常総会									1日 臨時総会						29日 通常総会							日 臨時総会		
承認事項	【改革の6項目】 ①牛乳乳製品の栄養健康機能に係る事業に重点化し一般普及事業は中止 ②「牛乳の日」「牛乳月間」は業界共同で実施し「Jミルクはその旗振り」 ③拠出金の減額 ④地域普及協会(事業)の見直し ⑤需給見通しなど共通課題への取り組みは継続 ⑥役員体制の見直し			23年度事業計画・予算の承認									24年度事業計画・予算の承認 ・移行時期の承認						23年度事業報告・決算の承認 ・新法人定款の承認							25年度事業計画・予算の承認		
理事会日程		18日 第1回理事会	2日 第2回理事会				21日 第3回理事会					17日 第5回理事会							17日 第1回理事会	日 第3回理事会			日 第4回理事会	日 第5回理事会				
当年度対応		総会附議事項の決定 ・23年度事業計画・収支予算		三役選任			24年度需給見通しの承認						24年度需給見通しの承認						23年度事業報告・決算の承認 ・新法人定款等・公益目的支出計画				25年度需給見通しの承認					
次年度以降対応							・新公益法人制度への対応方針を決定 ・24年度事業計画等の検討論点・スケジュールを確認							総会附議事項の決定 ・24年度事業計画・収支予算 ・公益目的事業の定義・移行時期					総会附議事項の決定 ・23年度事業報告・決算 ・新法人定款等・公益目的支出計画				25年度の事業計画の基本方向の確認	総会附議事項の決定 ・25年度事業計画・収支予算				
専門部会	需給取引専門部会	○			○																						○	
	普及専門部会		○																								○	
							○																					

## Jミルク会議報告

# 9月～12月までに行われた会議

Jミルク事業に係る各会議の報告です。総会、理事会をはじめ、各種専門部会、委員会の詳細はホームページよりご覧いただけます。

<http://www.j-milk.jp/>

### 第1回健康科学委員会

2011/9/21

委員長に石橋憲雄委員(一般社団法人日本乳業協会 企画・広報部部長、普及専門部会委員)副委員長に吉岡俊満委員(雪印メグミルク(株) ミルクサイエンス研究所長)を選任し、議事に入った。

平成23年度の牛乳乳製品健康科学情報事業について、現在既に進行しているものもあり、推進状況を報告した。

次に、平成24年度事業の考え方等についての課題の抽出を行った。

#### 確認事項

- 平成23年度牛乳乳製品健康科学情報事業の推進について、本委員会として了承。
- 平成24年度事業の課題抽出。

### 第2回健康科学委員会

2011/11/2

第1回委員会での議論の整理およびそれらに対する事務局提案について、事業推進上の課題について協議を行った。

#### 確認事項

- 平成24年度事業推進上、訴求すべき栄養健康機能の絞り込み、評価すべき事業とその目標等の課題。

### 第3回健康科学委員会

2011/12/2

第1・2回委員会での議論を踏まえ整理し、平成24年度以降の牛乳乳製品普及関連事業(健康科学情報開発整備事業)の方向付けについて協議を行った。

#### 確認事項

- 平成24年度以降の牛乳乳製品普及事業関連事業の基本的な進め方、事業の仕組み等。

### 第1回マーケティング委員会

2011/9/28

委員長に原宰委員(株)明治 乳製品企画管理グループ長)副委員長に齋藤淳(社)中央酪農会議 酪農理解対策室長補佐)を選出、議事に入った。

本委員会が管轄する事業について、平成23年度普及関連の枠組みと各事業の推進状況を説明し、今後の枠組みを含めて確認した。

そのうえで、平成24年度以降の事業を進める上での課題について議論をいただき、特に牛乳乳製品健康科学事業を中心に議論を行った。

#### 確認事項

- 平成23年度普及関連事業の枠組み及び具体的な事業推進状況。
- 平成24年度以降の事業推進上の課題抽出。

### 第2回マーケティング委員会

2011/11/8

平成24年度以降の事業を進める上での課題について、第1回委員会での議論と事務局案の基本方向について、生活者調査を参考に、方向性を議論した。

なお、学乳事業については、資料説明にとどめ、次回での検討課題とした。

#### 確認事項

- 訴求すべき栄養健康機能の絞り込みと、ミルクインフルエンザとのコミュニケーションについて。

### 第3回マーケティング委員会

2011/12/7

Jミルクにおける牛乳乳製品普及関連事業の枠組みを共有化した。その上で、平成24年度以降の事業を進める上で、第1回・第2回委員会での議論を踏まえた事務局案について議論した。

#### 確認事項

- 平成24年度牛乳乳製品普及関連事業の方向付けについて。

### 第3回需給委員会

2011/11/11

直近までの実績(9月までの牛乳乳製品統計)等を踏まえ、前回作成した「需給見通し」からの変化動向を確認・協議した。

#### 決定事項

- 今回作成した「需給見通し」は、前回の公表内容と大きな変化がないことから今回の公表は延期とした。

### 第4回需給委員会

2011/12/1

直近までの実績(10月までの牛乳乳製品統計)等を踏まえ作成した「平成23年度の需給見通し」及び「公表資料案」について協議を行った。

#### 決定事項

- 会議後、協議内容を踏まえ修正を行い、12月9日に公表(記者レク及びHP掲載)。

### 第1回生乳検査精度管理認証特別委員会

2011/9/20

Jミルク会長より諮問された9生乳検査施設について個別に審査した結果、全ての施設について生乳検査精度管理認証施設として承認・答申された。また、既認証取得施設2カ所より検査所廃止等による認証取消自主申告が提出され、認証取消(自主返上)が承認された。その他、社名変更による検査所名称変更が報告された。

#### 決定事項

- 平成23年10月1日付で申請9カ所を認証施設として承認。
- 既認証取得施設2カ所について、検査所廃止等により認証取消依頼書が提出され認証取消(自主返上)を承認。

### 第1回生乳検査精度管理委員会

2011/9/27

委員長に塩川隆平委員(関東生乳販売農業組合連合会 業務部長)副委員長に内藤博委員(農協乳業協会 専務理事)を選出し、議事に入った。

事務局より、平成23年度10月1日認証対象施設についての報告、既認証施設からの検査所廃止等による認証取消(自主返上)の報告があった。認証規程検討会より、上程された外部精度管理調査標準値の設定について協議された。

#### 決定事項

- 都府県の外部精度管理調査標準値の設定については、従来の乳技協の手分析から、外部精度管理調査結果の集計データをスクリーニングし、収束したデータの平均値をもって標準値とする。(北海道は従来どおり)次回の需給取引専門部会にて報告予定。

### 第2回課題検討委員会

2011/10/12

第1回委員会協議した酪農乳業の共通課題の洗い出し内容と酪農乳業セミナーの内容について確認を行った。

その後、「生乳生産基盤の確保への課題とその対応」について協議に入った。今回は、「生乳生産基盤の脆弱化」の定義付けと、その要因分析を行い、その対応についても協議を行った。

#### 確認事項

- 次回は、今回の論議を深める予定。

### 第3回課題検討委員会

2011/11/30

前回委員会協議した「生乳生産基盤の脆弱化の定義とその要因分析」について確認を行い、協議に入った。今回は、「生乳生産基盤の脆弱化」を解決するための取り組み内容について協議を行った。

#### 確認事項

- 次回は、今までの協議内容をまとめていく予定。

### 第1回ポジティブリスト委員会

2011/10/4

委員長に鍵山信儀委員(中国生乳販売農業協同組合連合会 代表理事常務)副委員長に日比野光一委員(一般社団法人日本乳業協会 生産技術部長)を選任し、議事に入った。

新たな委員を加えての平成23年度第1回の委員会であることから、これまでのポジティブリスト制度に対応した酪農乳業の取り組み概要を共有化した。

#### 決定事項

- 平成23年度定期的検査の実施内容を決定。
- 次年度に向けての取り組みについて協議。

# 平成23年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通し

(公表:平成23年12月9日)

## 1. 地域別の生乳生産量の動向

### 【生乳生産量予測の前提】

- 生乳生産は震災等の影響で廃棄、出荷停止が発生しており、一旦その影響を排除した上で、平成23年度の生乳生産量を予測モデルで算出した。更に、それを基に震災等の影響、直近の動向を考慮し、東北地域他の値を修正した。
- なお、実績値が判明したものは予測値を実績値に置き換えている。

表1:平成23年度 地域別生乳生産量の見通し

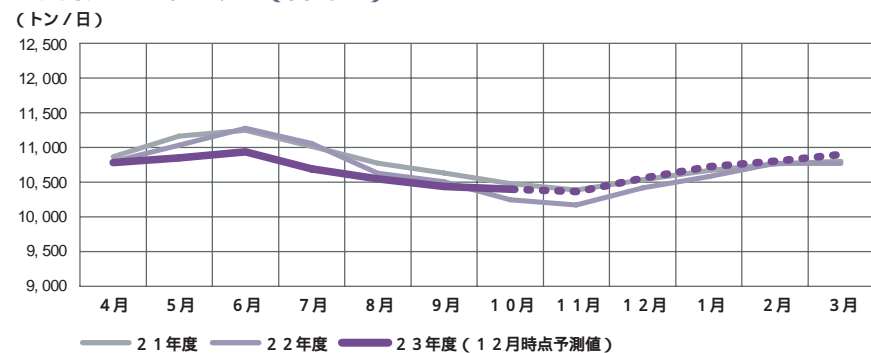
	全 国		北海道		都府県	
	前年比	前年比	前年比	前年比		
4 月	629	95.1 %	323	99.8 %	305	90.6 %
5 月	662	96.5 %	336	98.5 %	326	94.6 %
6 月	629	94.8 %	328	96.7 %	301	92.8 %
7 月	624	94.4 %	330	96.5 %	293	92.2 %
8 月	615	97.3 %	326	99.1 %	289	95.3 %
9 月	594	98.0 %	313	99.2 %	281	96.7 %
10月	620	99.5 %	322	101.4 %	298	97.5 %
11月	603	100.4 %	312	102.3 %	291	98.5 %
12月	633	100.1 %	328	101.7 %	305	98.5 %
1 月	643	100.3 %	333	101.6 %	310	98.8 %
2 月	612	103.4 %	313	104.3 %	298	102.5 %
3 月	664	104.9 %	338	101.3 %	326	108.9 %
第1四半期	1,919	95.5 %	987	98.3 %	932	92.6 %
第2四半期	1,833	96.5 %	969	98.3 %	864	94.7 %
第3四半期	1,856	100.0 %	962	101.8 %	894	98.1 %
第4四半期	1,919	102.8 %	984	102.4 %	935	103.4 %
上期合計	3,752	96.0 %	1,957	98.3 %	1,795	93.6 %
下期合計	3,775	101.4 %	1,946	102.1 %	1,829	100.7 %
年度計	7,527	98.6 %	3,902	100.1 %	3,624	97.1 %

閏年修正

年度計	-	98.4 %	-	99.9 %	-	96.8 %
-----	---	--------	---	--------	---	--------

10月まで実績値。11月以降予測値。

### 【北海道の生乳生産量(日均量)】



### 【北海道の生乳生産量】

上期1,957千トン(前年度実績対比98.3%、以降同じ)下期1,946千トン(102.1%)で、年度合計3,902千トン(100.1%)と見通される。

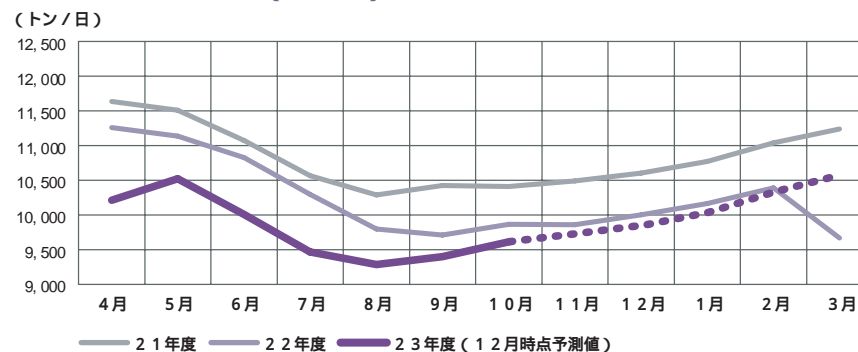
### 【都府県の生乳生産量】

上期1,795千トン(93.6%)下期1,829千トン(100.7%)で、年度合計3,624千トン(97.1%)と見通される。

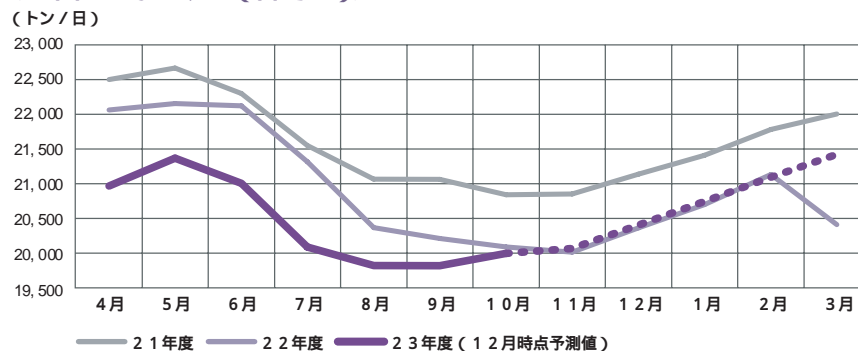
### 【全国の生乳生産量】

全国トータルの生乳生産量は、上期3,752千トン(96.0%)下期3,775千トン(101.4%)で、年度合計7,527千トン(98.6%)と見通される。

### 【都府県の生乳生産量(日均量)】



### 【全国の生乳生産量(日均量)】



## 2. 牛乳等生産量の動向

### 【牛乳等生産量予測の前提】

- 牛乳等生産量は震災等により平成23年3、4月に牛乳等需要に影響があったとし、平成23年2月までの実績値と5～10月の実績値にて予測モデルで算出。更に直近の動向を考慮し、修正を加えた。
- なお、予測値で実績が判明したものは実績値に置き換えている。
- 牛乳は、「学乳」「業務用牛乳」「業務用・学乳以外の牛乳」を別々に予測した値の総量。
- 「加工乳・成分調整牛乳・乳飲料」は、「加工乳・成分調整牛乳」と「乳飲料」に区分して予測した値の総量。

表2:平成23年度 牛乳等生産量の見通し

	牛乳類		牛 乳		加工乳・成分調整牛乳・乳飲料		はっ酵乳	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
4 月	401	101.2 %	254	103.2 %	148	97.9 %	68	91.7 %
5 月	431	101.0 %	270	102.6 %	160	98.5 %	72	92.3 %
6 月	431	99.0 %	270	100.0 %	161	97.5 %	78	101.2 %
7 月	437	99.5 %	262	99.9 %	175	98.9 %	77	99.9 %
8 月	423	99.6 %	246	100.3 %	177	98.5 %	74	102.5 %
9 月	445	99.4 %	272	99.2 %	174	99.5 %	76	107.5 %
10月	437	99.8 %	272	100.7 %	165	98.5 %	75	102.6 %
11月	401	98.6 %	254	98.8 %	147	98.4 %	68	101.9 %
12月	380	98.0 %	239	97.6 %	141	98.7 %	64	101.8 %
1 月	376	98.8 %	235	98.5 %	140	99.3 %	66	101.2 %
2 月	378	102.2 %	242	102.4 %	136	101.8 %	68	104.3 %
3 月	386	102.6 %	237	99.1 %	149	108.7 %	73	132.4 %
第1四半期	1,264	100.4 %	794	101.9 %	469	98.0 %	218	95.1 %
第2四半期	1,306	99.5 %	780	99.8 %	526	99.0 %	226	103.2 %
第3四半期	1,218	98.9 %	765	99.1 %	453	98.6 %	207	102.1 %
第4四半期	1,140	101.2 %	715	100.0 %	425	103.3 %	208	111.6 %
上期合計	2,569	99.9 %	1,574	100.8 %	995	98.5 %	444	99.1 %
下期合計	2,357	100.0 %	1,479	99.5 %	878	100.8 %	415	106.7 %
年度計	4,927	99.9 %	3,054	100.2 %	1,873	99.6 %	859	102.6 %

閏年修正

年度計	-	99.7 %	-	99.9 %	-	99.3 %	-	102.3 %
-----	---	--------	---	--------	---	--------	---	---------

10月まで実績値。11月以降予測値。

### 【牛乳類:牛乳・加工乳・成分調整牛乳・乳飲料の生産量】

上期2,569千kl(99.9%)下期2,357千kl(100.0%)で、年度合計4,927千kl(99.9%)と見通される。

### 【牛乳の生産量】

上期1,574千kl(100.8%)下期1,479千kl(99.5%)で、年度合計3,054千kl(100.2%)と見通される。

### 【加工乳・成分調整牛乳・乳飲料の生産量】

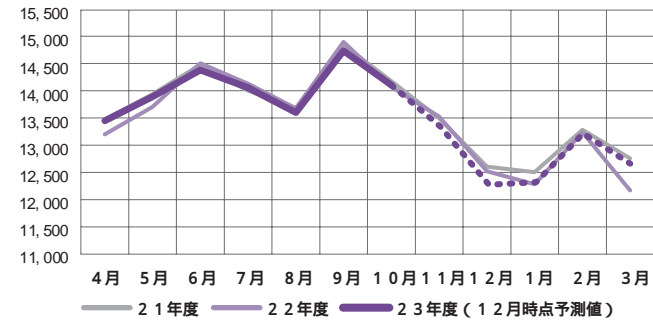
上期995千kl(98.5%)下期878千kl(100.8%)で、年度合計1,873千kl(99.6%)と見通される。

### 【はっ酵乳の生産量】

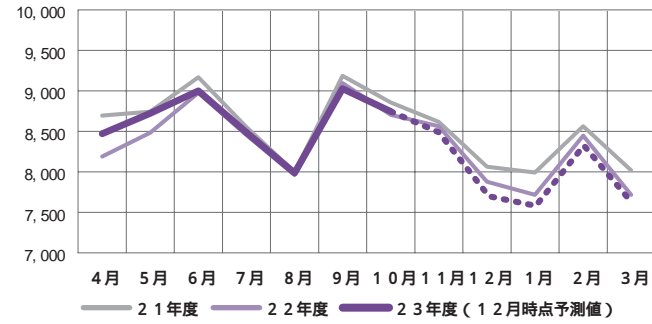
上期444千kl(99.1%)下期415千kl(106.7%)で、年度合計859千kl(102.6%)と見通される。



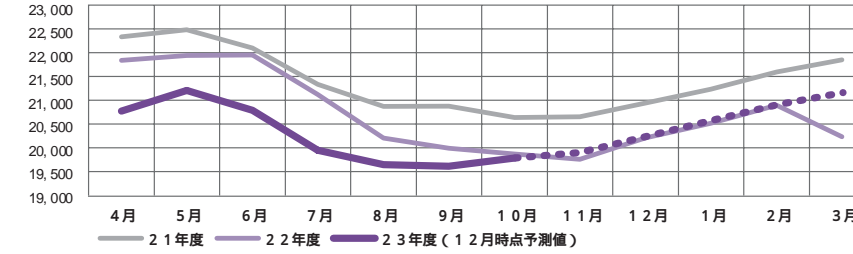
〔牛乳類:牛乳・加工乳・成分調整牛乳・乳飲料の生産量(日均量)〕  
(KL/日)



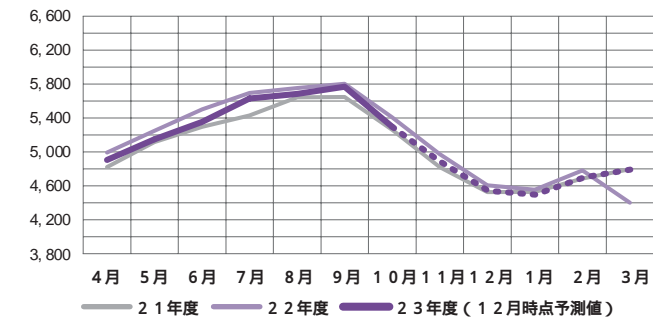
〔牛乳の生産量(日均量)〕  
(KL/日)



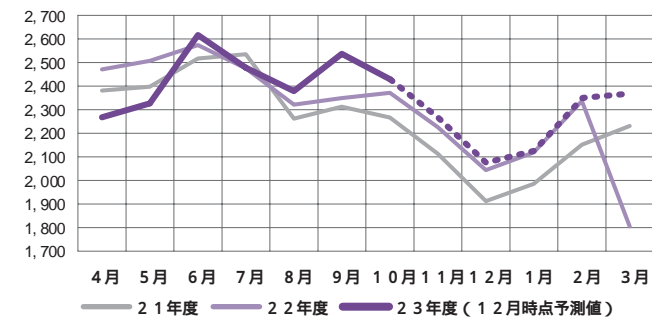
〔生乳供給量(日均量)〕  
(トン/日)



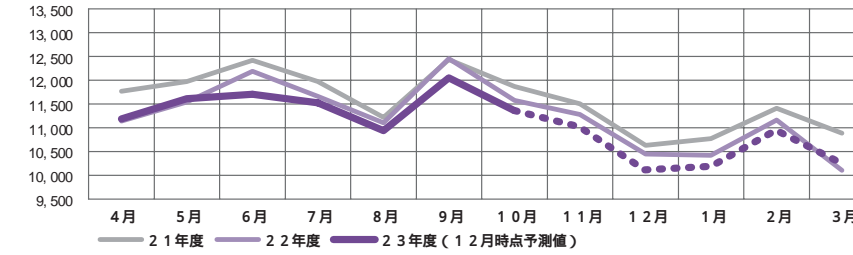
〔加工乳・成分調整牛乳・乳飲料の生産量(日均量)〕  
(KL/日)



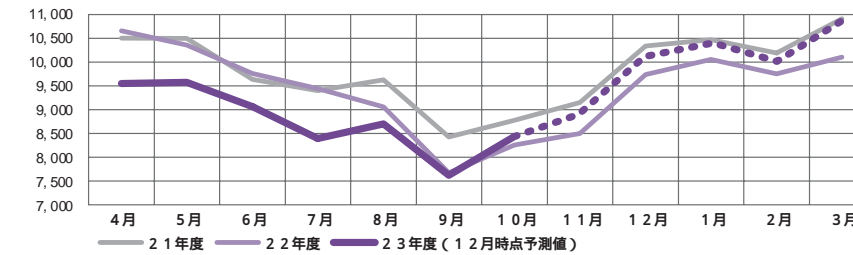
〔はっ酵乳の生産量(日均量)〕  
(KL/日)



〔牛乳等向生乳処理量(日均量)〕  
(トン/日)



〔乳製品向生乳処理量(日均量)〕  
(トン/日)



### 3. 用途別処理量の動向

【用途別処理量予測の前提】

- 生乳供給量は、生乳生産量から自家消費量を差し引いて算出(自家消費量は、各地域の本年度5月以降の実績値を勘案して算出)。
- 牛乳等向処理量は、牛乳、加工乳・成分調整牛乳、乳飲料、はっ酵乳の予測生産量を元に、生乳使用率、比重(1.032)及び歩留まり(99.5%)を勘案して算出。
- 乳製品向処理量は、生乳供給量と牛乳等向処理量の差。

表3:平成23年度 生乳生産量及び用途別処理量の見通し

	千トン											
	生乳生産量		自家消費量		生乳供給量				牛乳等向		乳製品向	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比		
4月	629	95.1%	5	92.2%	623	95.1%	335	100.4%	288	89.6%		
5月	662	96.5%	5	92.3%	656	96.5%	358	99.9%	298	92.8%		
6月	629	94.8%	5	91.9%	623	94.8%	352	96.3%	271	92.8%		
7月	624	94.4%	5	93.5%	618	94.4%	358	98.7%	260	89.1%		
8月	615	97.3%	6	90.6%	609	97.3%	339	98.3%	270	96.1%		
9月	594	98.0%	6	93.3%	589	98.1%	359	96.6%	229	100.6%		
10月	620	99.5%	6	89.5%	614	99.6%	352	97.9%	262	101.9%		
11月	603	100.4%	6	93.7%	597	100.5%	330	97.6%	267	104.3%		
12月	633	100.1%	6	92.6%	627	100.2%	314	96.8%	314	103.9%		
1月	643	100.3%	5	96.1%	638	100.3%	315	97.5%	322	103.2%		
2月	612	103.4%	5	99.6%	606	103.5%	316	101.1%	290	106.2%		
3月	664	104.9%	5	94.7%	659	105.0%	318	101.1%	341	108.8%		
第1四半期	1,919	95.5%	16	92.1%	1,903	95.5%	1,046	98.8%	857	91.7%		
第2四半期	1,833	96.5%	17	92.4%	1,816	96.6%	1,059	97.9%	760	94.8%		
第3四半期	1,856	100.0%	17	91.9%	1,839	100.1%	996	97.4%	843	103.4%		
第4四半期	1,919	102.8%	16	96.8%	1,903	102.9%	949	99.9%	954	106.1%		
上期合計	3,752	96.0%	33	92.3%	3,719	96.0%	2,101	98.3%	1,618	93.1%		
下期合計	3,775	101.4%	33	94.2%	3,742	101.5%	1,945	98.6%	1,797	104.8%		
年度計	7,527	98.6%	66	93.2%	7,461	98.7%	4,047	98.5%	3,414	98.9%		
閏年修正												
年度計	-	98.4%	-	92.9%	-	98.4%	-	98.2%	-	98.6%		

10月まで実績値。11月以降予測値。

〔生乳供給量〕

上期3,719千トン(96.0%)、下期3,742千トン(101.5%)で、年度合計7,461千トン(98.7%)と見通される。

〔牛乳等向生乳処理量〕

上期2,101千トン(98.3%)、下期1,945千トン(98.6%)で、年度合計4,047千トン(98.5%)と見通される。

〔乳製品向生乳処理量〕

上期1,618千トン(93.1%)、下期1,797千トン(104.8%)で、年度合計3,414千トン(98.9%)と見通される。

### 4. 都府県需給の見通し

表4:平成23年度 都府県の生乳需給の見通し

	千トン										
	生乳供給量		牛乳等向		その他乳製品向		A-B-C	移入量(必要量)		特定乳製品向	
	A	前年比	B	前年比	C	前年比		前年比	前年比		
4月	303	90.6%	293	99.0%	14	102.2%	-4	26	124.9%	22	48.6%
5月	323	94.8%	313	98.2%	15	113.8%	-5	28	116.5%	23	70.4%
6月	298	92.9%	307	94.2%	14	108.3%	-22	36	108.1%	14	87.1%
7月	291	92.3%	309	96.3%	14	96.4%	-32	44	109.4%	12	60.0%
8月	286	95.5%	289	95.3%	14	91.5%	-16	34	85.9%	18	83.5%
9月	279	96.9%	311	95.0%	14	107.3%	-46	54	88.8%	7	95.8%
10月	295	97.7%	305	95.8%	15	100.9%	-25	38	90.1%	14	116.8%
11月	289	98.8%	286	96.0%	15	100.0%	-12	27	81.4%	15	118.0%
12月	303	98.7%	272	94.8%	16	100.0%	15	23	83.0%	38	119.5%
1月	308	99.0%	275	95.7%	13	100.0%	21	23	95.2%	43	123.3%
2月	296	102.7%	275	99.2%	13	103.6%	9	22	88.2%	30	127.3%
3月	324	109.2%	276	99.6%	13	100.0%	36	21	104.5%	57	207.3%
第1四半期	924	92.8%	913	97.1%	42	108.0%	-32	91	115.2%	59	62.8%
第2四半期	856	94.9%	908	95.6%	41	98.1%	-94	131	93.9%	37	75.6%
第3四半期	886	98.4%	862	95.6%	46	100.3%	-21	88	85.4%	66	118.6%
第4四半期	929	103.6%	825	98.1%	39	101.2%	65	65	95.4%	130	151.1%
上期合計	1,779	93.8%	1,822	96.3%	83	102.8%	-126	222	101.5%	96	67.2%
下期合計	1,815	101.0%	1,687	96.8%	84	100.7%	44	153	89.4%	196	138.3%
年度計	3,594	97.3%	3,509	96.6%	168	101.7%	-82	375	96.2%	293	102.6%

10月まで実績値。11月以降予測値。

【都府県の生乳需給見通し】

- 都府県における北海道からの移入量は、7月までは前年度を上回って推移したが、8~10月と前年度を下回っており、その後も前年度を下回って推移すると見込まれる。(3月は前々年度比 100.1%)
- 都府県における特定乳製品向処理量は、9月までは前年度を下回って推移しているが、その後は前年度を上回って推移すると見込まれる。(3月は前々年度比 109.9%)

## 5. 乳製品需給の見通し

### 【脱脂粉乳、バター】の需給予測の前提】

- 特定乳製品向処理量は、「生乳供給量」-「牛乳等向」-「その他乳製品向」で算出。
- 脱脂粉乳、バターの生産量は、上記算出数量に各々の製造係数(前年度同月数値使用)にて算出。
- 消費量は、予測モデルで算出。(既存消費量の前年比は、前年度の新規需要創出数量を差し引いた数量で算出)
- 在庫月数は、「在庫量」÷「前年度平均月消費量」で算出。

表5-1:平成23年度 脱脂粉乳の需給見通し

千トン

	生産量		輸入 売渡し	消費量				過不足	在庫量		
	前年比	前年比		既存消費量		その他	民間在庫量				
				前年比	前年比		58.7		月数	前年比	
4月	12.4	78.1%		13.0	93.8%	13.0	94.2%	-0.5	58.2	4.6	81.0%
5月	12.7	84.4%		12.7	104.9%	12.7	105.5%	0.0	58.2	4.6	77.9%
6月	10.5	87.1%		14.0	108.9%	14.0	110.5%	-3.5	54.7	4.3	73.9%
7月	8.7	75.8%		13.1	87.0%	13.1	89.7%	-4.4	50.3	4.0	70.9%
8月	9.4	88.5%		12.6	94.3%	12.6	97.9%	-3.2	47.1	3.7	69.1%
9月	7.9	106.7%		12.1	83.3%	12.1	87.6%	-4.2	42.9	3.4	69.8%
10月	9.6	99.1%		12.1	89.5%	12.1	94.7%	-2.5	40.4	3.2	70.1%
11月	10.9	101.1%		11.4	94.3%	11.4	100.6%	-0.6	39.8	3.2	70.8%
12月	14.8	102.1%		12.8	94.9%	12.8	100.6%	2.0	41.9	3.3	73.0%
1月	14.4	101.4%		10.4	95.2%	10.4	101.0%	4.0	45.9	3.6	75.6%
2月	12.2	105.2%		11.1	95.0%	11.1	101.0%	1.1	47.0	3.7	77.6%
3月	16.0	103.7%		13.8	79.4%	13.8	101.0%	2.2	49.3	3.9	83.9%
第1四半期	35.7	82.8%		39.7	102.3%	39.7	103.1%	-4.0	54.7	4.3	73.9%
第2四半期	26.0	88.1%		37.8	88.0%	37.8	91.5%	-11.8	42.9	3.4	69.8%
第3四半期	35.3	101.0%		36.3	92.8%	36.3	98.5%	-1.0	41.9	3.3	73.0%
第4四半期	42.6	103.3%		35.3	88.3%	35.3	101.0%	7.4	49.3	3.9	83.9%
上期合計	61.7	85.0%		77.5	94.8%	77.5	97.1%	-15.8	42.9	3.4	69.8%
下期合計	77.9	102.2%		71.6	90.5%	71.6	99.7%	6.4	49.3	3.9	83.9%
年度計	139.6	93.8%		149.0	92.7%	149.0	98.4%	-9.4	49.3	3.9	83.9%

10月まで実績値。11月以降予測値。

### 【脱脂粉乳】

年度合計で、生産量は139.6千トン(93.8%)、消費量は149.0千トン(92.7%)と見通される。

年度末の在庫量は49.3千トン(83.9%)で、在庫月数は3.9ヶ月分と見通される。

表5-2:平成23年度 バターの需給見通し

千トン

	生産量		輸入 売渡し	消費量				過不足	在庫量		
	前年比	前年比		既存消費量		その他	民間在庫量				
				前年比	前年比		20.6		月数	前年比	
4月	5.7	72.8%		6.9	88.8%	6.9	88.8%	-1.3	19.3	2.8	59.5%
5月	5.9	79.9%	2.3	6.9	119.3%	6.9	119.4%	1.3	20.6	3.0	60.5%
6月	5.0	82.2%	2.5	6.8	113.2%	6.8	113.8%	0.6	21.2	3.1	62.1%
7月	4.3	76.5%	1.7	6.3	93.8%	6.3	95.5%	-0.3	21.0	3.1	62.9%
8月	4.5	87.5%	1.1	5.6	87.2%	5.6	89.3%	0.0	21.0	3.1	64.5%
9月	3.5	101.9%	1.9	6.0	90.1%	6.0	91.5%	-0.6	20.3	3.0	68.1%
10月	4.2	93.9%	2.0	6.9	95.1%	6.9	96.9%	-0.7	19.7	2.9	72.0%
11月	4.8	101.1%	2.1	6.9	90.0%	6.9	91.6%	-0.0	19.7	2.9	80.6%
12月	5.9	102.1%		8.3	89.9%	8.3	91.6%	-2.4	17.3	2.5	82.2%
1月	7.2	101.4%		5.1	89.8%	5.1	92.4%	2.2	19.4	2.8	86.2%
2月	5.9	105.2%		6.3	90.2%	6.3	92.4%	-0.4	19.0	2.8	89.9%
3月	7.4	103.7%		6.6	85.4%	6.6	92.4%	0.9	19.9	2.9	96.4%
第1四半期	16.5	78.0%	4.8	20.7	105.3%	20.7	105.5%	0.6	21.2	3.1	62.1%
第2四半期	12.3	86.6%	4.7	17.8	90.5%	17.8	92.2%	-0.9	20.3	3.0	68.1%
第3四半期	14.8	99.4%	4.1	22.0	91.5%	22.0	93.2%	-3.1	17.3	2.5	82.2%
第4四半期	20.5	103.3%		18.0	88.3%	18.0	92.4%	2.6	19.9	2.9	96.4%
上期合計	28.8	81.4%	9.5	38.5	97.9%	38.5	98.9%	-0.3	20.3	3.0	68.1%
下期合計	35.4	101.6%	4.1	39.9	90.0%	39.9	92.9%	-0.5	19.9	2.9	96.4%
年度計	64.1	91.4%	13.6	78.4	93.7%	78.4	95.7%	-0.7	19.9	2.9	96.4%

10月まで実績値。11月以降予測値。

### 【バター】

年度合計で、生産量は64.1千トン(91.4%)、消費量は78.4千トン(93.7%)と見通される。

年度末の在庫量は19.9千トン(96.4%)で、在庫月数は2.9ヶ月分と見通される。

輸入売渡し数量13.6千トンは、当初予定されていた輸入量11.6千トンと追加輸入量2.0千トンの合計である。

## 6 生乳及び牛乳乳製品需給をめぐる情勢について

### 〔生乳の生産及び供給〕

- 生乳生産は、前年度の口蹄疫発生や猛暑が残した影響が今年度にも引き続き影響を与えていることや、3月の東日本大震災による生乳生産基盤への直接の影響、その後の原発事故の影響による一部地域の生乳出荷停止などに加え、本年度も平年に比べ6月～9月は気温が高かったことで、9月までは前年度に比べ減少が続いていた。
- しかし、10月以降の生乳生産量は、北海道においては、分娩頭数が増加していることから前年を上回って推移すると予測される。都府県においては、震災影響のあった東北・関東においても回復基調であり、口蹄疫の影響があった九州においても前年同月を上回って推移する予測から、全体として回復基調で推移すると予測される。
- 当面する生乳供給は前年度並に推移し、2月は閏年、3月は前年度の震災の影響から前年同月比で大きく上回る。なお、前回9月時点で見通した生乳生産に比べ、北海道、都府県ともに増加で推移すると予測される。

### 〔牛乳乳製品及び生乳の需要〕

- わが国経済は、円高基調やデフレ経済の影響を受けた景気回復の遅れにより、家庭消費が低調に推移していることに加え、東日本大震災直後は消費者行動に大きな影響があったと推察される。なお、その後の節電による影響も懸念されたが、結果的には市場に対する大きな混乱は生じなかった模様である。
- 牛乳類の需要動向については、短期的には震災直後の牛乳乳製品のサプライチェーンの混乱により特異な様相を呈したが、現時点ではほぼ落ち着きを取り戻しており、今後は、前年度をやや下回って推移すると予測される。
- 乳製品の消費動向については、今後も、バター・脱脂粉乳ともに、前年度を下回って推移すると予測される。

### 〔生乳の需給〕

- 以上の状況と本見通し策定の前提に立てば、都府県の生乳需給は、これまでは供給が需要を下回る状況であったが、今後牛乳類の消費が減少する時期に向けては、供給が需要を相当程度満たすことが予測され、生乳の広域的な需給調整にあっては乳製品需給にも配慮した適切な対応が求められる。
- したがって、今後の北海道からの生乳移入の必要量については、前年水準を下回って推移するものと予測されるものの、都府県の飲用向必要量はごく短期に変動する可能性もあり、酪農乳業関係者が引き続き的確な配乳調整に努め、適切に生乳移入等を実施することが必要である。
- また、乳製品向処理量は、生乳生産量の増加と相俟って9月以降は前年度を上回っており、当面、この傾向が継続すると予測される。

### 〔酪農乳業の課題と対応〕

#### 1 牛乳類の学乳休止期における的確な対応

現時点の需給予測を踏まえると、都府県における特定乳製品向処理量は、学乳休止期の冬休み(12・1月)及び春休み(3月)は前年度を上回ると見通される。冬休み(12・1月)については、年末年始の特定期間に処理が集中するため、処理能力の限界もあり、わずかな需給変動によって大きな混乱を生じること想定される。また、春休み(3月)は大きな処理必要量が予測され、且つ期間も長いため、一層の計画的な対応が求められる。

酪農乳業関係者は需給調整に大きな混乱が生じないように、日々の需給動向及び乳製品向処理の発生状況等の情報共有化に努め、的確な配乳計画や処理計画を策定し、適切なオーダー、配乳調整に努める必要がある。

#### 2 乳製品需給の適正化について

今後の生乳生産量の回復予測から、全国の特定乳製品向処理量は、前年度を上回って推移すると予測される。一方で、バター・脱脂粉乳については計画的な供給等が成されていることから、流通量が前年度を下回って推移しており、前回9月時点の見通しに比べ、在庫状況はやや好転し、1月以降は在庫の積み増しができる状況と見通される。

しかし、今後の乳製品需要は不確定要素が多いことに加え、昨年より在庫量そのものは減少していることから、酪農乳業関係者はユーザーが混乱しないよう、業界全体として計画的な供給と適正な流通に努め、的確な需給情報を提供する必要がある。

#### 3 酪農乳業の共通課題への取り組み

口蹄疫、猛暑、大震災、放射性物質問題の発生と酪農生産基盤を揺るがす諸問題が発生しているが、一方で牛乳乳製品を安定供給するために、需給予測に基づく的確な需給調整を推進していく必要がある。

# IDFワールドデューリーサミット2011 (in パルマ)

## 概要

開催地:イタリア パルマ市  
期 間:平成23年10月15日(土)~19日(日)

過日イタリアで開催された『IDFワールドデューリーサミット2011』について、概要を報告する。IDF(国際酪農連盟:International Dairy Federation)は、酪農・乳業の振興への寄与、消費者の栄養・健康・幸福への寄与等を目的とした、世界の酪農乳業関係団体による非営利国際機関(現在の会員国は52ヶ国)である。同サミットは、IDF業務全体の報告及び意見交換を行う『IDFフォーラム』と、酪農乳業界にとって関心・興味のあるテーマを取り上げる『特別講演会』の2部構成で毎年開催されている。

なお、サミットの講演内容等詳細については、JIDF(国際酪農連盟日本国内委員会)で後日纏められる報告書を参照願いたい(私も含めJIDFからの参加は40名で、分担して報告書を執筆)。

サミットのメインであるIDFフォーラム及び特別講演会は、16日~19日の4日間に渡って、隣接するバガニーニ講堂とパルマ市立会議センターの2会場、計4ホールを用いて開催され、『酪農政策と経済』『健康と栄養』『飼養管理等技術』『食品の安全』『家畜の健康と福祉』『マーケティング』等の幅広い分野において、総勢百名以上の各国の報告者からの講演等が行われた(参加者総数は2千人規模)。

今年度のサミットでは、『成長と持続可能性』が主なテーマとなっており、初日にバガニーニ講堂のメインホールで行われた『ワールドデューリーリーダーズフォーラム』や『サプライチェーンに関するグローバル円卓会議』においても、世界規模における食料確保と安定供給、消費と利用可能資源との不均衡、といった問題を主論点として講演・意見交換が行われていた。(ただし、



サミットの様子



パルミジャーノ・レジャーノの製造過程



バガニーニ講堂入口にて

これは今年度に限ったことではなく、ここ数年一貫した問題意識として、『中長期的に見れば世界的な需要は増大していくと考えられるが、その需要増を満たすためには、様々なレベルにおける、環境問題・市況・経営等の諸問題を解決していく必要がある。』といったことがあるようだ。)。

私のJIDF報告書の担当部分である『マーケティング』の講演においては、主に、近年発達の著しい新しいコミュニケーションツール、いわゆるソーシャルメディアと言われるものを如何にして活用していくか(これからは従来の情報発信型だけではなく、情報の共有化・参加型での戦略も重要となってくる)といったことについて、実践事例の紹介・報告がなされた。

また、講演会以外では、ポスター展や後援企業ブースでの乳製品等紹介が行われており、再来年にサミットを開催する横浜の紹介ブースでは、パンフやストラップ・メンコといった小物を配布するなどし、それなりに盛況だった。

その他には、現地の酪農家や乳製品工場見学等のテクニカルツアーが組まれており、伝統的製法を守り続けるパルミジャーノ・レジャーノのチーズ工房は、やはり一見の価値があり大変勉強になった。

なお、サミット全体の感想としては、残念ながら一番に思い浮かぶのは『イタリアらしく、いい加減な部分が多かった』ということである。兎にも角にも、情報(アナウンス)が足りなかった。それをもう少し分解するなら、『準備がいいかげん』『参加者への配慮ができていない』といったところだろうか。言語が異なる国からの参加者にとっては、それだけで多大なストレスになるということが実感できる数日間ともなった。参加者によっては、『イタリアだからしょうがないね』で済ませられるレベルを超えていたのではないかとも思う。

2013年開催の横浜は、会場が複雑(ホテルからの移動も電車が必要となる場合が多い)とも聞いているので、様々なケースを想定し、今から準備を進めておく必要があると思われる。

(Jミルク企画情報グループ 本田航)

# 第38回酪農海外現地実務研修会に参加して

## 概要

訪問地:ニュージーランド、オーストラリア  
期 間:平成23年11月5日(土)~15日(火)

平成23年11月5日より15日まで、中央酪農会議主催のオセアニアにおける第38回海外実地実務研修会に参加した。たきかわ農業協同組合の工藤正光組合長を団長とする総勢17名で、ニュージーランドではフォンテラ本社、同社の乳製品工場であるテ・ラバ工場、酪農生産者、オーストラリアではデリーオーストラリア、マレ・ゴールバン社、LIC、酪農生産者を訪問して研修した。

主な研修テーマは、1. 価格支持制度撤廃の影響及び各段階での対応、2. 生産者の経営の現状、3. 乳業メーカーの再編と今後の経営戦略、4. 輸出及び国内マーケット戦略、5. 酪農団体の再編・統合の経緯と成果、6. 消費拡大対策と効果、7. 安全・安心、家畜防疫等に係る取り組みの7項目である。

研修先のうち、酪農乳業界に向けた情報サービスなど、『ミルクと類似した役割を担っているのが、メルボルンにあるデリーオーストラリア(DA)である。DAは『国際的競争力を持ち、革新的で持続性のある乳業界を育む』ことを目的とした『業界が所有、出資するサービス組織(DA資料より)』である。以下、DAでの研修内容について報告する。

Jミルクでは事業改革の一つとして、一般消費者向けの広報を取りやめた。これはDAも同様で、以前はバターやチーズのメディア広告を行っていたが、現在は予算\*がないこともあり、広告は各メーカーで行っているとのこと。また、医師、栄養士、

\*DAの年間予算は、約\$A3,000万で、半分の\$A1,500万が研究開発費。別途、政府から研究開発費として\$A1,500万が援助金として支給される。



どこまでも続く放牧場:  
ニュージーランド ワイカト地方



デリーオーストラリアにて:  
日本語の説明資料に感激

マスコミなどのオピニオンリーダーに焦点を当て、牛乳乳製品の健康・栄養の利点について広報していることも、『ミルクとの共通点であり興味深い。』

研修団からの『日本では数年前に牛乳は健康に悪いと書かれた本が売れたことがありました。オーストラリアではそのようなことはありませんか。』という質問には、『オーストラリアにも、そのような主張をする組織がいくつかあります。取るに足りないものもありますが、テレビで取り上げられるような場合にはDAで科学者を雇用して、そういった主張を批判する活動をしています。』との回答があった。

折しもTPPについて取りざたされている最中であり、オーストラリアの酪農生産者は、これに大きな関心を寄せている様子であった。生産者を代表する組織『Australian Dairy Farmers Ltd(ADF)』の会長からは、研修団に向けて『オーストラリアの生産者は日本の積極的な乳製品取引に感謝しています。また、オーストラリアの乳製品が日本市場で喜ばれていると聞いており、乳製品の輸出は酪農生産者への見返りとなっているので、それを阻害する対策には反対します。』というメッセージがあった。その一方、研修で講話をして頂いたADFの取引担当者は、『オーストラリアは約100カ国に乳製品を輸出しており、今後、日本への輸出を増加させる意図はありません。』との見解も示した。

今回の研修に参加して、特にDAでの研修を通じて、『ミルクは今までも増して『酪農乳業界のために』をモットーに、牛乳乳製品のサプライチェーンにおいて求められる、価値ある情報の提供に努めていくことが重要であると実感した。

(Jミルク企画情報グループ 鎌滝薫)



搾乳場に向かう牛:オーストラリア メルボルン近郊の農場

# 放射性物質検査結果

福島第一原発事故による放射能問題は、食品に対する消費者の不安を一層高めており、様々な情報による風評被害も報告されています。このような中、「放射性物質の検査結果」のページを公開しています。

<http://www.j-milk.jp/topics/9fgd1p000001r6yk.html>

## 放射性物質の検査結果ページについて

Jミルクでは、「原乳中における放射性物質の検査結果について」と「牧草中の放射性物質の調査結果について」を分かりやすくグラフ形式と表形式でホームページ上に掲載。データは、農林水産省のHPから随時更新している。

### 情報へのアクセス方法

● Jミルクサイトのトップページ右側にある「震災対応放射能問題」バナーをクリック。

● 「震災対応放射能問題」ページが開き、上部に「Q&A データ類」というコンテンツが表示される。

牛乳の放射能問題に関するQ & A  
 「原乳中における放射性物質の検査結果について」  
 「牧草中の放射性物質の検査結果について」

検査結果は、都道府県別に分けられ、ページが作られている。「原乳中における放射性物質の検査結果について」は、報道発表都道府県、報道発表日、産地製造所等、採取日、品目、ヨウ素131、セシウム134、セシウム137の情報を掲載。「牧草中の放射性物質の調査結果について」は、市町村、検査対象、採取日、セシウム134 + セシウム137、ヨウ素13の情報を掲載。



### 今後のスケジュール 平成23年12月7日～平成24年3月までの会議・行事の開催予定を掲載致します。

	開催日	場所	内容	講師(敬称略)
医療関係者向け情報提供	1月15日	京都国際会館	病態栄養学会	田中司朗
	2月23日	神戸ポートピアホテル	静脈経腸栄養学会	細井孝之
栄養関係者向け情報提供	12月9日	千葉市	栄養士を対象としたセミナー	玖村朗人 他
	1月22日	熊本市		八村敏志 他
	3月3日	秋田市		北澤春樹 他
メディア広報対策	2月7日	大手町サンケイプラザ	第28回メディアミルクセミナー	
第4回理事会	1月20日	Jミルク会議室	平成24年度需給見通しと課題、平成23年度事業報告(下期)、平成24年度事業計画・予算の方向性と課題審議、新法人化対応経過報告	
第5回理事会	2月17日	Jミルク会議室	平成24年度事業計画・予算審議、新法人化定款、移行時期の審議	
臨時総会	3月1日	K K R ホテル東京	平成24年度事業計画・予算承認、移行時期の承認	
普及専門部会	1月17日	Jミルク会議室	平成24年度牛乳乳製品普及関連事業の事業の枠組み及び平成24年度以降の事業に係る今後の進め方の検討	
	2月7日	Jミルク会議室	平成24年度牛乳乳製品普及関連事業の事業計画案の検討	
第3回需給取引専門部会	1月16日	Jミルク会議室	平成24年度需給見通しの検討、平成23年度生乳及び牛乳乳製品流通関連事業の進捗確認、平成24年度生乳及び牛乳乳製品流通関連事業の枠組みの検討	
第5回需給委員会	1月11日	Jミルク会議室	平成24年度需給見通しの検討	
第4回課題検討委員会	2月9日	Jミルク会議室	委員会協議事項のまとめ	
第3回マーケティング委員会	12月7日	Jミルク会議室	平成24年度牛乳乳製品普及関連事業の方向付けの検討	

上記は予定であり、日時・場所・講師等変更する場合があります。

### 編集後記

すっかり冬となり、本年度春より発行をはじめたJミルクレポートも、第3号を発刊することができました。本レポートは、Jミルク事業の「見える化」と有益情報の提供を目的としています。まだまだ、事業内容の羅列に留まっており、充実した内容には程遠いと思いますが、今後も協会役員一同でより良いものにする所存です。

次回には、皆様からのご意見やご要望を取り入れるために、アンケートも実施する予定です。今後も、皆様からの「声」をJミルクにお寄せいただきたくお願いいたします。(T.N)